

nikkor club

281
2025 SUMMER

特集

夏から秋、
夜撮影を愉しむ
写真家が綴る物語



CONTENTS

表紙写真 小林 淳

夜の帳が降りた四日市コンビナート。無数の光と立ち上る煙、無機質でどこか遠い異世界のような絶景。ポートビル「うみてらす14」の展望台から眺めるその光景は、神秘的な輝きを放っています。まさに、夜を撮影する楽しみが詰まった一枚です。
Z6・NIKKOR Z 24-70mm f/4 S・f/10・8秒・ISO100



特集 五感で撮る

08 夏から秋の夜を愉しむ物語

写真・解説 三好和義／山野泰照／別所隆弘／小林 淳／熊切大輔

02 73rd ニッコールフォトコンテスト募集開始

コンテスト

- 32 サロン・ド・ニッコール カラーの部
選評：ハナブサ・リュウ（1～3席）／小林紀晴（佳作）
- 44 サロン・ド・ニッコール モノクロームの部
選評：上田晃司
- 52 ネイチャー・フォトサロン
選評：大西みつぐ
- 60 ステップアップ・フォトサロン
選評：秋山華子
- 65 ワンポイントアドバイス
- 66 総評／得点表
- 68 予選通過者一覧

作品

- 04 THE GALLERY企画展
「MY FOCAL LENGTH」 古屋呂敏
- 08 THE GALLERYセクション展
「GIFU NIGHTTIME GLOW」 小林 淳
- 表4 佐藤倫子×Z5II

製品情報

- 28 PRODUCT REVIEW VOL.31
NIKKOR Z 28-135mm f/4 PZ 上田晃司
- 73 ニッコールクラブ会員限定
Z5IIニッコールクラブ会員向け販売

連載

- 表2 Photography Portfolio Vol.5
三好和義
- 20 インスピレーション 第5回
私が影響を受けた
『詩人・金子光晴』 小林紀晴
- 22 多彩な現場でも
その実力を発揮するニッコールレンズの魅力に迫る
水中×NIKKOR Z 14-30mm f/4 S
写真・解説：中村卓哉
- 24 THE AWARD WINNER
第26回（2024年度）三木淳賞 受賞作家
斎藤利奈 文・写真：タカザワケンジ
- 26 エプソン 楽しくきれいにプリント講座 Vol.24
プリントの疑問・質問、お答えします！
- 30 アベっちの使った！撮った！ vol.9
Z5II 阿部秀之
- インフォメーション
- 69 NCニュース
- 74 Let's Go Nikon College！ 第20回
視点を変えると写真も変わる！
スナップ撮影の基本 藤山 武
- 75 PHOTO HUB 写真展開催
- 76 写真展スケジュール
- 77 会員写真展 PICKUP！
「遙か北の山にて」 溝部久美子／「居所・一隅」 和田喜博
- 78 支部だより・支部展情報
- 79 イベントレポート
- 表3 自分らしい表現を Nikon College
- 巻末 ニッコールクラブ登録情報変更依頼書
会報282号フォトコンテスト応募規定

五感で撮る

夏から秋の夜を 愉しむ物語

日が少しずつ長くなると、夜の時間が待ち遠しくなる――。

初夏の蛍の光、夏の花火、星空、夜の街や秋の夜の祭り。

闇の中に浮かび上がる景色は、

まるで光で描かれた一枚の絵のよう。

これからやってくる季節に、

夜だからこそ出会える美しさがあります。

5人の写真家がそれぞれに見つけた、夜の愉しみ方。

この夏から秋、あなたはどんな夜と出会いますか？

第1夜 蛍 ―― 一秒の舞を追いかけて 三好和義

第2夜 天体 ―― 私だけの星空を探しに 山野泰照

第3夜 花火 ―― 夜空に咲く花！ひと夏の記憶 別所隆弘

第4夜 都市・工場夜景 ―― 昼とは違う姿を見せる街の光／巨大建造物 小林淳

第5夜 祭り ―― 余韻を感じる、光と音と匂い 熊切大輔



予告のなく上がる花火をシークレット花火という。その日は万博の開幕の日で一切の告知がなかったが、なんとなく虫の予感のようなものに導かれて、三脚撮影可能な展望台に向かった。同じようなことを考えた数人の人たちと「上がるかな」なんて話をしながら待つ。夜が深まり、金色のリングが夜空に輝く。その瞬間、誰も見たことのない光景が目の前に広がった。花火が上がった！

Z8・NIKKOR Z 24-120mm f/4 S・f/9・6.3秒・ISO100（撮影：別所隆弘）



nikkor
club

7月中旬に岩手県折爪岳で撮影したヒメボタル。夕刻18時ごろに準備を始め、20時過ぎに100万匹が一斉に光り輝く。この場所は撮影者のために特別に区画整理され、車の出入りなども控えるようになっている。 Z8・NIKKOR Z 135mm f/1.8 S Plena・f/1.8・30秒・ISO3200

一秒の舞を追いかけて 蛍

第1夜

三好和義 = 写真・解説

蛍

の撮影で一番留意しなければいけないのは、暗いということ。あたり前なのですが、意外と盲点。僕は明るいうちに現場に行き、撮影場所、構図などを決めて、その風景を事前に撮っています。暗くなったら、その場所ですと蛍を待つ、ジタバタしません。暗くなって蛍が現れると、撮影場所を探す人もみかけますが、時間を有効に使いたかつたら、事前の準備が大事です。

レンズはもちろん明るいZOOM OR Z 135mm f/1.8 S Plenaを使っています。ヒメボタルの撮影では、わずかな光も出さないことが大切で、背面の液晶モニターやメ

モリーのアクセスランプも黒テープで隠します。これは最低限のマナーです。蛍の生態への配慮も大切にしましょう。カメラの機能としてはスターライトビューが有効です。森の中、日没後の暗い場面でもAFが正確に利き、構図を決める時にも活用しています。

蛍の撮影時間はおよそ1時間。光り始めると30秒の露光でシャッターを切り続けます。夢のような1時間。本当に撮れているかな？と撮影中に不安になることもありますが、黄色い蛍がキッチンと写っています。撮影が終わって確認できたら、夢じゃなかったと安堵の瞬間が訪れます。

暗い場所なので、蓄光テープを有効に使うことも肝要です。レンズやボディ、三脚から椅子に至るまで、あらゆる場所に小さな蛍光テープを貼って、どこに何があるかを把握できるようにします。その時、形を四角にしたり三角にしたりして分類するのも工夫のひとつ。撮影が始まって三脚の位置がずれたら、それまでの努力も台無しに。なにより事前の準備、心構えが大切です。ヒメボタルはあまり上を飛ばないのでアングルを低く構えると、レンズの前を横切ってくれるでしょう。ありがたい、そんな気持ちで撮影していると満足な蛍撮影ができるような気がします。



深い森の中に自生する小さなアジサイの花にピントを合わせた。すると手前や背景に輝く蛍が丸い点になった。ポケ味もあって幻想的な作品に。15枚を比較明合成して、より蛍の輝きを表現した。 Z8・NIKOR Z 135mm f/1.8 S Plena・f/1.8・30秒・ISO6400

POINT

- おすすめレンズ

明るい標準から望遠のレンズ

- お役立ち道具

黒テープ

(少しでもカメラの明るい部分は隠す)

- 撮影に対するアドバイス

画角を決めて蛍を待つ

『詩人・金子光晴』

小林紀晴



バトバハ川。対岸に水面に群生しているのはニッパ椰子。金子はどういうわけかこのニッパ椰子を愛した。「このまっすぐなニッパよ。漂白の友よ。ニッパは女たちよりやさしい。」「ニッパ椰子の唄』の一節にはこうある。

「かへらないことが
最善だよ。」

それは放浪の哲学。

詩人・金子光晴（1895、1975）の詩の一節だ。金子光晴の存在を知ったのは、まだ私が新聞社の社員フォトグラファーをしていた頃のこと。1980年代の終わり。偶然、金子の旅記『マレー蘭印紀行』の存在を知った。書店を巡ってみてもどこにも在庫はなく、取り寄せて手にいれた。

蘭印とはインドネシアのことを指す言葉だと後で知った。昭和の初めに金子は妻とフランス・パリを目指す。その前後に立ち寄った東南アジアのことが本書には綴られている。流浪する旅人の姿に私は憧れた。

その後、手に入るだけ金子の本を買い求めた。『どくろ杯』『ねむれ巴里』『西ひがし』15冊からなる全集は古書店で見つけた。さらに書かれている場所を訪ねることがいつしかライフワークとなった。

最初は26歳のとき、中国の上海へ。昭和元年、金子は長崎から上海へ定期航路の船で向かう。その跡を追って、私も51年ぶりに復活した同じ定期航路によって向かった。

「青かった海のいろが、朝眼をさま



バトバハの「日本人倶楽部」の建物がそのまま残っていた。昭和の初めにのゴム園や鉱山などのために入植した日本人の拠点となった建物で、金子はここで何度も逗留している。4×5カメラ※で撮影した。



バトバハのヒンドゥ教寺院で出会った祭司の男性。この町にはインド系の住民も多く、金子は毎朝、ロツテ(麺麭)と呼ばれる南インド風の無発酵パンを「カッピー店」で食していたと記されている。

して、洪水の濁流のような、黄濁いろに変わって水平線まで盛りあがっているのを見たとき(略)」

この海の色を私も見たかった。そして実際にその体験を得た。足元の海は黒いのに、その先に茶色く濁った巨大な海面が広がった。揚子江から流れてた「濁流」だ。それに船全体が包まれた。やがて視界のすべてを「濁流」に覆われた。大陸の存在を想像するには十分すぎた。

その後も金子の書籍を携えて旅をした。パリでは金子と妻が泊まっていた安宿やアパートを探し当てた。もっとも思い出深いのはマレーシアのバトバハという小さな町。金子が

もっとも愛した町だ。金子は「僕の友達が二百人いるとしても、これから先もそのうちの一百九十八人は知らないで終わるにちがいない」と記している。本当に小さな田舎町で訪ねるのに苦労した。日本から4×5カメラ※を携えてシンガポールへ。さらに長い間、ローカルバスに揺られた。やっとたどり着いたその町には、かつて日本人が入植したゴム園があった。

いまでも旅にでるときは必ず、金子の書籍を携える。もはや一種の守りみたいなものだ。最近では電子書籍があって、それに変わった。味気ないけど軽さには敵わない。



73rd NIKKOR PHOTO CONTEST

受付期間

2025年7月4日(金) 必着

作品 募集

7月4日締切！新設「Web部門」で初挑戦也大歓迎

1953年創設、国内屈指の歴史と規模を誇る「ニッコールフォトコンテスト」。

プロ・アマ、機材メーカー問わずどなたでも参加可能です。

今回は「Web部門」が新設され、より気軽に応募できるようになりました。

入賞者には最大50万円の賞金、作品集掲載、東京・大阪での展示も！

お気に入りの1枚、大切な1枚でのご応募をお待ちしております。

※詳細はWebサイト又は今号に同封されている「第73回ニッコールフォトコンテスト応募票」をご確認ください。

部門

自由部門 (単写真/組写真)

▶ カラー/モノクロどちらの作品もご応募いただけます。テーマは自由です。

ネイチャー (自然・風景) 部門 (単写真/組写真)

▶ 自然風景・動植物などの作品をご応募ください。

U-18部門 (単写真/組写真)

▶ 2025年7月末現在18歳以下の方はご応募いただけます。

NEW! Web部門 (単写真)

▶ 専用ページよりご応募ください。

<https://nij.nikon.com/activity/nikkor/ncpc/73/sp/>

組写真部門は縦、又は横に統一した作品を最大4枚で表現してください。

審査員



写真家
秋山華子



写真家
上田晃司



写真家
熊切大輔



写真家
小林紀晴



写真家
佐藤倫子



写真家
三好和義



写真家
中藤毅彦



GENIC編集長
藤井利佳

詳しくはWebへ

● 第73回ニッコールフォトコンテスト スペシャルコンテンツ

<https://nij.nikon.com/activity/nikkor/ncpc/73/sp/>



nikkor club

自分らしい表現を

Nikon College



ニッコールクラブ会員
¥1,000 割引
～¥5,000

※割引対象外の講座もございます。
詳細はニコンカレッジWebサイトをご確認ください。

7月・8月・9月講座

6月10日(火) Web公開予定

<https://nij.nikon.com/nikoncollege/>

詳しくはニコンカレッジWebサイトをご覧ください。



ニコンカレッジの特長

1 少人数制ならではの きめ細やかなサポート

少人数制のニコンカレッジでは講師との距離が近いので、気軽に質問ができます。講師は受講生一人一人をしっかりとサポートします。撮影実習では受講者同士のコミュニケーションも取りやすいので、きっといい写真仲間が見つかります。

3 プロのフォトグラファーやクリエイターから 実践的なノウハウが学べる

ニコンカレッジには全国の第一線で活躍中のプロのフォトグラファーやクリエイターが多く在籍しています。幅広い分野の撮影テクニックや、写真/映像表現のノウハウをプロから学ぶことができます。

2 初心者から上級者まで楽しめる カリキュラム

カメラを始めたばかりの方でも気軽に参加できる「1日体験クラス」から「基礎」、「実践」、「写真表現」、そしてご自身の作品の「発表」を目指す「作品創作」まで、一連の講座クラスをご用意しています。

4 対面講座は全国7都市で開催、 どこからでも受講できるオンライン講座も

札幌、仙台、東京、名古屋、大阪、広島、福岡での対面講座とオンライン講座をご用意しています。お住まいのお近くで講座を受けることで地域の写真仲間を見つけることができます。

佐藤倫子 × Z 5Ⅱ



Z5Ⅱ・NIKKOR Z 26mm f/2.8・f/10・1/200秒・ISO1000（福岡八幡宮 二の宮神輿）

台輪幅4尺5寸
重さ2トンの黄金神輿。
肩を入れて担ぐのは
7年ぶりとなるこの夏、
Z5Ⅱの軽さは
いいショットを
引き寄せてくれるだろう。
今から撮るのが楽しみだ。